増田友也の建築と壁の造形

ARCHITECTURAL FORM OF THE EXTERNAL WALL IN CONCRETE BUILDINGS DESIGNED BY TOMOYA MASUDA

長岡大樹 ——— * 1

キーワード:

増田友也, 建築家, 壁面構成, ファサード, 打放しコンクリート, ルーバー

Keywords:

Tomoya Masuda, Architect, Spatial composition of wall, Facade, Exposed concrete, Louver

Daiju NAGAOKA ——— * 1

The purpose of this study is to clarify the architectural style and work of Tomoya Masuda (1914-1981). He organized his own architectural studio Atelier Masuda in Kyoto university, and there he designed many exposed concrete buildings. The architectural form of external walls on the facade is characterized by several aspects, such as the architectural vocabulary of facade design, the additional element, the overlap of surface elements. As a result, his architectural work is divided four stages by the change of facade motif 1) eaves 2) frame with wing walls and flat roof slab 3) roof and massive wall 4) wall covered with louver.

1. 序

本稿では、建築家・増田友也の建築作品を考察する。増田友也(1914-1981)は、1950年から1978年まで京都大学建築学教室で教育・研究・設計活動を行った。京大退官を記念して編まれた『著作・作品目録』には、著作は61題・建築作品は84作品(実施案61、計画案23)とある¹⁾。著作は、増田の没後『増田友也著作集』にまとめられた²⁾。しかし建築作品は、作品集や雑誌特集を通してその全貌が紹介されたことはない³⁾。筆者は、増田の建築作品に関わる資料の収集を進め、このたび全作品の外観(外壁面)の意匠を把握するまでに至った。

増田は京大増田研究室を拠点に旺盛な設計活動を行った。建築作品のほとんどは鉄筋コンクリート造で、壁面の全体から細部(例えば手摺壁やその支柱)に至るまで可能な限りコンクリートだけで造られた。こうした造形方針は生涯変わらず、一貫して鉄筋コンクリートによる空間表現が追求された。特に壁の形態は、節度を保ちながらも様々で、建築表現の展開がよくみてとれる。一方著作でも、建築の初発的表現として、「壁による隔離」という空間現象が何度も引合いに出された⁴⁾。増田は、建築を発生させる原初的な動機として「外界から隔離されていること」「囲われていること」を挙げており、「壁を立て、隔てる」という建築的行為に特別な意味を見出していたと思われる。ここでは増田が実現させた建築作品の壁を取りあげ、その形態分析を行う。

本稿の目的は、増田の建築作品の特徴と変遷(年代的傾向)を記述し、そこに建築表現の型(形式)を見出すことである。ここでは壁の「形態構成」を問題とするがその意義は二点ある。まず壁の造形を「構成的要素による構築」として記号的・構造的に捉えることで、建物用途や敷地条件に左右されることなく、対象作品すべてを同じ尺度で記述できる。また作品間の差異や類似といった関係性から「建築家固有の表現」を描くことができる。このように本研究は、建築空間の意味や創作理念までは問題としておらず、専ら壁の造形の形式的な特徴を取り扱う。形態分析に終始する本稿ではあるが、例えば増田がある表現に固執していた時期や建築表現を大きく切り替えた時期がわかれば、同時期の著作(建築論)との照会が可能となる。増田は

「思索なくして制作はなく、制作なくして思索はない」⁷⁾という立場にいた。増田の建築と建築論を包括的に考察するためには、増田友也研究の早い段階で、建築表現の枠組みを把握しておく必要がある。

増田の建築作品を取りあげた既往文献を整理すると、①代表的な一作品の意匠の特徴を増田の思惟と共に解説したもの⁷⁾¹²⁾、②設計活動の紹介として主な作品を列記し、作品総体の特徴を簡潔に述べたもの⁶⁾⁸⁾⁹⁾¹³⁾、③主要な作品に通底するモチーフや手法を指摘したもの⁵⁾¹⁰⁾¹¹⁾がある¹⁴⁾。これに対して本稿は、全作品の形態構成を初めて分析したものである。各作品の壁面意匠の記述とその類型化を行い、増田特有の表現形式の一端を明らかにしようとするものである¹⁵⁾。

2. 壁の造形分析

分析を行ったのは、記念碑や給油所といった内と外を隔てる壁のない建物および目録掲載のない最初期の住宅群を除いた「すべての実現作」と、計画案で終わった「京大会館」を合わせた61の作品である(表1)¹⁶⁾。No. 12、35、46の鉄骨造を除いて58の作品が鉄筋コンクリートの構造で、61作品中50の建物が「コンクリート打放し」仕上げであった。

意匠や作風の変遷を読み取るために、建物の着工を設計案の確定と捉えて、全61作品を「着工年月順」に並べた(表1)。検討したのは、建物のいわば顔といえるファサードの壁面(主入口のある壁面、広場や道路、南の方向に面した壁面のいずれか)である。壁の機能は、「建物に相応しい外観を与えること」「内と外を隔てること」の二点に集約される。したがって壁の造形として、「外壁面の構成」と「内と外の境界を構成する壁面要素の前後関係」の二点を分析した。

2-1. 外壁面の構成

全作品を通覧すると、壁体に庇や屋根が付帯するかどうか、壁面意匠の大きな違いをつくっていた。したがって外壁面をまず性格づけるのは、「庇・屋根・壁」の有無と組合せといえる。そして壁面上での「庇・屋根・壁」各要素の造形的特徴を検討したところ、全作品から8種類の「壁面の構成手法」が抽出できた(図1)。庇による壁面の構成手法は、①庇が壁体からキャンティレバーで張出し、ファサードに水平の

*1 富山大学芸術文化学部 助教・工修
(〒933-8588 富山県高岡市二上町180)

*1 Assistant Prof., Faculty of Art and Design Univ. of Toyama, M. Eng.

帯を与える「張出し庇」。②庇の役割を果たす屋根スラブと両サイドの袖壁が、壁面全体を門型(Π形)に枠づける「壁面全体の門型枠」である。屋根による壁面の構成手法は、③屋根を壁から持上げて、壁の輪郭(特に壁の上辺)を際立たせる「屋根の持上げ」がみられた。壁による構成手法は、④建物の骨組である柱・梁の方形架構を壁面全体に表出させる「柱梁による方形架構」。⑤一枚の重厚な壁を建物の正面に据え内外を隔てる「重厚な一枚壁」。この壁面には石張りやコンクリート目地切り等、岩肌のような仕上げが全面に施され、窓は無しか一つだけ穿たれている。⑥外壁からガラスを後退して設えたバルコンに垂直ルーバーを並べる「バルコンのルーバー分割」。垂直ルーバーがバルコンを繰返し分割するため、壁面には彫りのある矩形パタンが並ぶ。⑦GL から軒まで届く垂直ルーバーを壁体に組み込んだ「垂直ルーバー壁」。ルーバーの垂直線が上下層を跨いで執拗に繰り返す、そのパタンは裏側の内部空間にも表出する。⑧と違って内部からルーバー間に入り出できない。⑧隣り合う室を雁行型にずらして並べ、屈折する壁面を構成する「雁行型屈折壁」。各室の壁面は、間口いっぱいの窓を持ちΠ形枠で縁取られている。

以上の構成手法は、壁面に陰影を伴った明暗の効果をもたらしている。①は軒下の陰影の帯と庇の明るい帯が上下に積層し、②はファサード全体が翳りのあるヴォイドを抱え、③は屋根裏の陰影が壁の上辺を明瞭にする。④は架構の格子が窓の矩形暗部を縁取り、⑤は壁面のテクスチャーが壁全体に繊細な陰影を与え、⑥はルーバーのパタンが壁面に彫りを与える。⑦は日射を遮蔽/反射する縦ルーバーの連続が、光と翳が混じり合う被膜状の壁を形成し、⑧は屈折壁の入隅に陰の溜まりをつくる。

外壁面に付加する要素は、骨組架構の口型パタンを日型に分割する横架材「=」と(事例・図 1④)¹⁷⁾、手摺壁や庇の先端を覆う幕板の水平材「□」がみられた(図 1①)。こうした水平的な要素は、荷重を分担しておらず、壁面での位置・幅・後退距離を自由に設定できる。そのため建物の垂直性を静めるなどファサードのプロポーションを調整している。他に目をひくのは量塊的な付加要素で、壁面の主入口から前面道路に向かって大きく伸びる入口キャピレ「◆」と(写真 1)、量塊的な曲線

表現を伴った要素「●」(図 2)がみられた。正面から見て両端部が曲線状に反り上がったキャピレもみられた「(◆●)」(図 1⑤)。

外壁面の断面形状は、36/61 作品が垂直面であった。他に最下層をセットバックした壁面「▽」、ボリューム付加や傾斜によって上層部が迫出した壁面「▼」(図 1⑥)、基壇部を築くなど上層に向かって壁がセットバックする雛段状の壁面「▲」(図 1③⑦⑧・写真 2)がみられた。

2-2. 境界を構成する壁面要素の前後関係

次に内と外の境界を構成する「壁面要素の前後関係」を検討した(図 2下)。内と外の境界面を構成する壁面要素は、①窓ガラス面「|」②バルコン「パ」③垂直ルーバー「ル」④手摺壁「手」⑤手摺の外側に張出した屋根・庇の軒先「軒」の5種類みられた。壁面要素の前後関係は、窓ガラスを起点にしてその外側の要素を順番に並記し「バル手軒」のように記号表現した。なお軒先が手摺壁と一致する場合は「手」と表記し、軒先が手摺壁の外に張り出す場合のみ「手軒」と表記した。また記号一つの|は、ガラスと外壁面が一致した平滑な壁を表す。このように記号列の長短や組合せから、壁の奥行きや彫りの深さ、壁面の透明性、屋内と戸外のつながり方を読み取ることができる。

2-3. 壁の造形的性格と四つの時代

以上の四項目「壁面の構成手法・壁の付加要素・断面形状・壁面要素の前後関係」を各作品に対して検討した(図 2)。その結果が表 1 である。表 1 の横軸からは各作品の造形的特徴が、縦軸からは増田の作風の変遷が読み取れる。使用された構成手法の年代的分布をみるために、「隣り合う○の間隔が4マス以内で○が6個以上のまとまり」を原則としてグレー表示した。すると No. 20 付近と No. 40 付近を境目に、壁の造形を主導する要素が、「庇→屋根と壁→壁」と切り替わっていることがわかった。このように作品全体は、壁の造形モチーフの違いから、「庇」の時代(No. 1~21)、「屋根と壁」の時代(No. 20~45)、「壁」の時代(No. 40~41~61)に大分類でき、さらに「庇」の時代は、方形架構の壁面から「張出し庇」が伸びる前半(No. 1~9)と、袖壁と屋根スラブが壁面全体を枠づける後半(No. 10~21)に判然と分けることができ

図 1. 壁面の構成手法(8種類)

図 2. 分析例(壁の造形的性格)

る。総合すると増田の建築作品は、壁の造形に焦点を当てた場合「Ⅰ期(初期)」「Ⅱ期(前期)」「Ⅲ期(中期)」「Ⅳ期(後期)」と呼びうる**四つの時代**に区分できる。次章からは各時代の壁の造形的特徴や、建物の中での壁の捉え方や取り扱いについて述べる。

3. 底の時代

Ⅰ期(初期)とⅡ期(前期)を通して、壁の造形を主導するモチーフは「底」である。「張出し底」と「門型の枠底」、張出し底を省略した「方形架構の壁面」の三系列の造形がみられた。

3-1. 張出し底と方形架構の壁

第Ⅰ期(初期・1957～1959)のすべての作品は(No. 1～9)、水平材と垂直材による方形架構が壁面を構成する。梁の延長体である張出し底がファサドをめぐり、各層ごとに水平の帯が走る。底裏の小梁・梁端を覆う幕板・手摺壁などのコンクリート部材を、上/下、手前/奥、点/線/面といった関係で巧妙に組合せ、部材の見え隠れや精緻な奥行が壁面に与えられている(図1①)【Ⅰa型】。南淡町庁舎や京大工学部校舎はじめロコトの建築では底は省かれ、「方形架構と横架材による日型のパタン」が壁面全体を覆う(図1④)。横架材の視覚的な水平効果で、ファサドの層序は曖昧にされ、建物の垂直性が弱められている。壁の隅々まで均質に構図された中心や焦点のない壁といえる【Ⅰb型】。

3-2. 壁面全体の門型枠

第Ⅱ期(前期・1960～1963)の作品(No. 10～21)は、袖壁と屋根スラブがファサド全体を門型に枠づけている(図1② 図2)。この時期、7/12の作品が正方形の建築体で、底やバルコンなど窓に付随する要素を壁に吸収することで、外形の幾何学性が保持されている。門型枠内のヴォイトを横断する水平材「□」が立面の構図を引き締め、壁面下部のセットバック「▽」がヴォイトの奥行を一段と深めている【Ⅱ型】。

4. 屋根と壁の時代

第Ⅲ期(中期・1963～1971)は、屋根とマップな壁が壁面の主導モチーフである(No. 20～45)。壁から持ち上げられた屋根は、コンクリートの可塑性を生かしてシェル構造やPC(プレストレストコンクリート)で伸びやかに造形化され、建物の上辺に限る(No. 21～44)。ラーメン構造を包む壁は、支持機能から解放されていっそう自由に造形化されている。構造に囚われないこの時期の壁は表情豊かで、壁の在り方が増田の言う「純隔離用壁」―純粋な隔離のための壁に近づいている¹⁸⁾。

4-1. 重厚な一枚壁と量塊的表現

道路側のファサドに、重厚な一枚壁を初めて据えたのがNo. 20 東山会館(写真1)である(No. 20～41)。壁はコーナーで回り込まずに袖壁として余分に伸び、「一枚の壁」として明確に分節化されている(図1⑤⑥ 写真1)。壁面からは、巨大な入口キャビレーが伸び、壁とキャビレーがセットで厚みのあるファサドを形成している。またキャビレーの肉感的な形態が、前庭の空間に確かな輪郭と形を与えている。一枚壁の表面は、ハツ仕上げや型枠の目地模様が施され、コンクリートの素肌とは趣の異なる岩肌のような量塊的表現が与えられている(図1⑤)【Ⅲa型】。

4-2. バルコンのルーバー分割と彫刻的表現

No. 14～45の比較的長い時期みられるのが、バルコンのルーバー分割による彫刻的な壁である。コンクリート壁の懷に深く入りこんだバルコンを、垂直ルーバーが区画するため、壁面には彫りのある矩形が並ぶ。正方形や黄金比など幾何学の秩序で構図された矩形群は、ボリュームに穿たれた

「穴」であると同時に、視覚に訴える「パタン」でもある【Ⅲb型】。

No. 21 鈴木自動車本館は、壁が四面とも「バルコンのルーバー分割」で、壁の層が「バル手軒」と厚く、最も彫琢された印象を受ける作品である(図2)。優美な大屋根を浮かせたNo. 31 智積院会館は、出入口のある東西の妻壁が量塊壁、南北の側壁が彫刻壁で、彫刻壁を手前に傾斜させて壁の量感を一段と強調している(図1⑤⑥)。こうした二種類のマップな壁の併存は、No. 20、23、27、30、39の作品でもみられる。

5. 壁の時代

第Ⅳ期(後期・1968～1980)の作品(No. 40・44～61)は、壁がモチーフで、「垂直ルーバー壁」と「雁行型屈折壁」の二系列が同時展開する。

面の重なりが少ない簡潔な壁が、中期の重厚な壁に取って代わる。

表1. 壁の造形的性格

作品番号 No	着工年月	作品名 作品名の右肩に印は「コンクリート打放し仕上げ」を示す。	壁の造形										壁の造形に基づいた時代区分	
			外壁面の構成								壁面要素の 前後関係 (壁の重層性)			
			8種類の構成手法						外壁面の 付加要素					
			庇	屋根	壁	柱梁の方形架構	重厚な一枚壁	バルコニーのルーバー分割	垂直ルーバー壁	雁行型屈折壁		外壁面の断面形状		
												張出し庇		壁面全体の門型枠
01	1956.1	南淡町庁舎	-	-	-	-	-	-	-	=	-	-	I	
02	1957.1*	日本放射線高分子研究会*	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	I	
03	1958.0	天橋立ハイウス	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	I	
04	12	蹴上浄水場	○	○	○	-	-	-	-	=□	-	-	I	
05	1959.0	尾道市庁舎	○	○	○	-	-	-	-	□	-	▽	I	
06	03	大阪府立放射線研究所本館	○	○	○	-	-	-	-	=	-	-	I	
07	09	坂記念館	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	I	
08	10	須磨女子学園	○	○	○	-	-	-	-	=□	◆	-	I	
09	10	京大工学部1号館	○	○	○	-	-	-	-	=	-	-	I	
10	1960.0	鳥羽下水処理場*2 室	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	II	
11	12	衣笠山の家/一次計画案	-	○	-	-	-	-	-	□	-	▽	II	
12	1961.0	鳴門市民会館	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	II	
13	10	鳥羽下水処理場管理棟	-	○	-	-	-	-	-	□	-	▽	II	
14	12	京大原子炉実験所	-	○	-	-	-	-	-	□	-	-	II	
15	1962.0	尾道市公会堂	○	○	○	-	-	-	-	□	●	-	II	
16	02	Sさんの家	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	II	
17	07	成山荘	-	○	-	-	-	-	-	□	-	▽	II	
18	07	鳴門市庁舎	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
19	07	州市庁舎	○	○	○	-	-	-	-	□	-	▽	II	
20	1963.0	東山会館	○	○	○	-	-	-	-	□	●(●●)	-	II	
21	09	鈴木自動車本館	○	○	○	-	-	-	-	□	●	-	II	
22	-	新和歌浦インフォセンター	-	○	-	-	-	-	-	□	●	-	II	
23	1964.0	大山青雲閣	-	○	-	-	-	-	-	□	(●●)	-	II	
24	01	第一工業ビル工場	-	○	-	-	-	-	-	□	-	-	II	
25	07	第一レーン工場	-	○	-	-	-	-	-	□	-	-	II	
26	08	京都山ノ内浄水場	-	○	-	-	-	-	-	-	●	-	II	
27	-	鶴屋吉信社員寮	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	II	
28	1965.0	名神八日市カトリック*1	-	○	-	-	-	-	-	□	◆	-	II	
29	07	赤のれん本店	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	▽	II	
30	10	羽田記念館	-	○	-	-	-	-	-	-	●(●●)	-	II	
31	1966.0	智積院会館	-	○	-	-	-	-	-	□	●(●●)	▽	II	
32	05	ジャパノフィニッシュセンター	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	II	
33	06	大福機工新社	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▽	II	
34	06	新和印刷本社工場	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	II	
35	09	東京女子医大研究所	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▽	II	
36	10	グリスパシオ*2 ミニシアターハウス	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▽	II	
37	11	松村石油本社	-	○	-	-	-	-	-	-	●	-	II	
38	11	清水市中央公民館	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
39	1967.1*	京大大型計算機センター	-	○	-	-	-	-	-	□	●	-	II	
40	12	清水有度第二小学校	-	○	-	-	-	-	-	-	(●●)	▽	II	
41	1968.0	京大東会館・計画案	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	II	
42	1970.0	横川定光院	-	○	-	-	-	-	-	□	-	▲	II	
43	11	豊岡市市民会館	-	○	-	-	-	-	-	-	●	-	II	
44	1971.0	京大総合体育館	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▲	II	
45	03	京大工学部8号館	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▲	II	
46	11	鳴門中学校	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▲	II	
47	1972.0	北灘東小学校・幼稚園	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▲	II	
48	-	岡本邸	○	○	-	-	-	-	-	=□	-	-	II	
49	1973.0	法華*2 京都本店	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	II	
50	11	北灘西幼稚園	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
51	1974.0	鳴門第二中学校	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▲	II	
52	11	鳴門勤労青少年ホーム	-	○	-	-	-	-	-	-	-	▲	II	
53	12	瀬戸幼稚園	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
54	1975.0	北灘西小学校	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
55	1976.0	桑島幼稚園	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
56	07	瀬戸小体育館	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
57	07	鳴門東小学校	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
58	12	鳴門市老人福祉センター	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
59	1979.0	鳴門東幼稚園	○	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	
60	1980.0	鳴門市文化会館	-	○	-	-	-	-	-	-	●(●●)	-	II	
61	10	鳥田小学校・幼稚園	-	○	-	-	-	-	-	-	◆	-	II	

注1) *印付の「着工年月」は、竣工年月から推定したものである。工事期間を中小規模の建築は6ヶ月、大規模建築は12ヶ月と仮定して算出した。また竣工年のみ判明している建物の着工は、竣工年前年の最後に着工した建物とみなした。注2) 壁面要素の前後関係が2種類ある場合、一方を()内に記載した。

＜外壁面の付加要素＞凡例
□：柱間の横架材
◆：手摺壁の帯・幕板
●：入口キャノピー
●：曲線要素(壁根裏側の曲線も含む)
(●●)：曲線のある入口キャノピー

＜外壁面の断面形状＞凡例
▽：最下層のセットバック
▽：壁上部の迫出し
▲：上層への階段状セットバック
―：垂直面

＜壁の造形の時代区分＞凡例
I：Ⅰ期(初期)
II：Ⅱ期(前期)
III：Ⅲ期(中期)
IV：Ⅳ期(後期)

5-1. 垂直ルバー壁

ルバーと壁が一体化した「垂直ルバー壁」の初出は、1968年・京大会館である(写真2)。京大会館は敷地中央に体育館兼オーディトリウム・吊り屋根の懸垂曲線と側壁がファード全体を門型に枠づける大建案を配置し、その周囲を屈折する回廊や中庭、低層施設が囲む。低層部の壁は、量塊壁を差し挟みつつも基調となるのは垂直ルバー壁「Ⅱ」である。「等間隔」と「ランダム」の二種類のルバー配列は、壁に面した空間に律動感を与え、浅く透けた壁は、内部空間と屋外を浸透させる。

三年後、同じ敷地に建てられたNo.44京大体育館は、大階段の基壇部に壁と屋根が載る古典的な三層構成の建物である(図1③)。壁は四面ともランダム配列の垂直ルバー壁で、壁の屋内側にも外と同じパタンのルバー壁が四面に取り付けられた。外ルバーと内ルバーが半透明ガラスをサンドイッチした境界面「Ⅲ」は、三重のフィルターとして直射日光を濾過・拡散し、スポーツ活動に適した柔らかな光を内部に届ける。

Ⅳ期の後半、鳴門市の文化施設No.52・58・60は、ブザを囲むように建ち、等間隔の垂直ルバー壁「Ⅱ」で外観を統一している(図1⑦)。見付150mm、GLから軒までの高さ三層分のコンクリートルバーは、方立(マリオ)のように壁に沿って整然と並ぶ。半ば面的表現といえるルバーの反復は、ブザに一定の包圍感をもたらす。と同時に内部にも表出し、内と外の空間を同時に秩序づけている。中期の彫塑的な壁から転じて、「開きつつ閉じる」半透明の相をした壁が実現している【Ⅳa型】。

5-2. 雁行型屈折壁

No.40有度第二小学校以降、増田は多くの学校教育施設を手がける。教室や保育室を片廊下形式で並べず、部屋を雁行型に配列した建物が提案された。部屋の数だけ屈折する壁面がファードを形成している。さらに上階の部屋を下階から後退して、屋上庭園(ルーフテラス)を設けることも多い。壁面を平面・断面の両方向で屈折して隣室との接触を減らすことで、外に多く囲まれた独立性の高い学習環境が形成されている(図1⑧)【Ⅳb型】。

こうした学校建築も含め後期になると、基壇部が築かれた雛段状の壁面「▲」をもつ建物が急増している(図1③⑦)。これはルバー壁や屈折壁といった「面の重なり」の少ない壁によって失われた「マジックな建築表現」を、建物の全体形に補填する—あるいは全体形に転調させる操作と考えられる。その他、後期特有の壁面要素として、幼稚園でのトネリ状の入口ボリュームがある(写真3)。向かい合う一対の壁を道路まで引き伸ばして、主屋へのアプローチとしている。このボリューム要素は道路に向かって伸びている点で、中期の入口キャビの造形に近い¹⁹⁾。

写真3 No.55 桑島幼稚園

6. 結

以上のように増田の建築作品は、壁の造形に着目すると、7つの型(Ⅰa～Ⅳb)と4期に渡る変遷という表現形式に則って成立していた。ファードの全体的構図を重んじる造形方針と、壁のモチーフに応じてマジックな表現をアレンジしていく造形展開は、全期に渡って一貫しており、壁を重視した増田の制作態度のあらわれと考えられる。

前期と中期を橋渡しする東山会館、中期と後期をつなぐ京大会館は、いずれも五種類の構成手法を同時に用いて、壁を豊かに調子づけている。こうした壁の印象が、一見したところ曖昧で大らかなのは、前の時代に培われた造形と、新たな造形の萌芽をうまく溶け込ませ

ているためである。こうした型にはまらない未分化な造形の壁は、建物が生成するさまを見るように創意に富んでいる。遺作となった鳴門市文化会館も、すべてがコンクリート打放しで造られた。建物の外壁一周を展開し一枚の壁に見立てると、形態の異なる17種の壁が、区切れよく標準レールのように連なっている。ここでの壁の多彩な表情—特に抽象彫刻のように彫琢された中庭の造形は、壁を重視した設計活動の締め括りに相応しい相貌といえよう(写真4)。

参考文献

- 1) 京都大学工学部建築系教室 増田研究室記念事業会編：『増田友也先生退官記念 著作・作品目録』、私家版、1978(目録に、最初期の住宅作品群は除外したとの記載がある。また増田は京大退官後も設計活動を行ったので、退官後に計画・竣工した鳴門東幼稚園と島田小学校・幼稚園は掲載されてない。
- 2) 増田友也著作集編集委員会：『増田友也著作集(全五巻)』、カンザイ出版、1999
- 3) 1968年から72年にかけて計画・竣工した5作品を紹介した、栗田勇編：『現代建築家全集14』、三一書房、1972(pp.51～79, 192～198, 209, 212～213)があるが、その内容は三十年に及ぶ増田の設計活動の一部分といえる。
- 4) 「壁による隔離」を建築の初発的表現として取りあげた増田の論文は多い。例えば、「隔離—壁」「壁と私と空間と—建築家にとって空間とは何か—」「日本の空間表現について」(いずれも『増田友也著作集1巻』に所収)や「建築計画概説」(『建築士コース』所収、産業図書、1953)等がある。
- 5) 渡辺豊和：同棲集団と増田友也、『建築評論』、第8号、pp.77～83、建築評論社、1973(なお文献5)から13)は出版年月の古い順に並んでいる。
- 6) 加藤邦男：建築学教室の講座 6. 建築意匠学講座、『京都大学工学部建築学教室六十年史』pp.124～129 京大建築学教室創立六十周年記念事業会 1980
- 7) 田中喬：京都 東山会館を訪ねて—私記から—保存について思う、『建築術の実践：京都の場合』、pp.1～76、カンザイ出版、1989
- 8) 長田直之：京都建築学派、『建築MAP 京都』、pp.78～79、TOTO出版、1998
- 9) 前田忠直：建築以前—増田友也の思索の方法について、『日本建築学会大会研究協議会資料集』、1999.9
- 10) 前田忠直：増田友也の思惟、『建築と社会』2000年9月号、第942号vol.81、日本建築協会、2000.9
- 11) 松本正：遠い聲音……未だ見ぬ師、増田友也へ、『まちなみ』2003年2月号、Vol.1.27/No.307、pp.10～13、大阪府建築士事務所協会、2003.2
- 12) 前田忠直：京大体育館前庭の白梅に想う、『京都大学工学広報』、No.49、京都大学大学院工学研究科・工学部、2008.4
- 13) 前田忠直：増田友也、『建築論辞典』、pp.216～217、彰国社、2008
- 14) ①から③の文献のなかでも本稿と関わり深いものは、増田の建築作品に対して、壁の造形の多様性を指摘し、特徴的な空間構成の手法として「壁による隔離」「底による開放」を挙げた文献10)13)や、代表的作品の作風が直線的構成から面的表現に、さらに塊(マス)の表現へと移行していることを指摘した文献11)である。また文献5)は、増田の建築家像を描こうとした唯一の文献で、増田への取材と建築作品(特に京都大学総合体育館および同期の作品)の考察から、増田の建築家としての特異性を指摘している。
- 15) 増田に関する筆者の拙稿は次のものがある。・徳島県鳴門市に現存する増田友也の建築作品、日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)、PP.537～538、2007.8・増田友也の「隔離」概念、同学術講演梗概集(中国)、PP.777～778、2008.9・増田友也の建築と底の意匠—東山会館までのRC造建築作品について、同学術講演梗概集(東北)、PP.243～244、2009.8
- 16) 分析対象から除外した作品は、肱川橋欄干、ラックビル、丸善石油芦屋業平給油所、松村石油名古屋給油所、広島原爆災害調査班遭難記念碑、清水市総合競技場観覧席、および『著作・作品目録』でも除外された最初期の住宅群である。京大会館は計画案であるが代表的作品のため分析対象に加えた。『著作・作品目録』には、1978年3月の増田退官時までに計画された作品が掲載されている。目録にないが分析した作品は、表1 No.59とNo.61である。
- 17) ()は具体的事例を示している。これ以後()内の「事例・」は省略する。
- 18) 「隔離—壁」4)を参照(初出：日本建築学会研究報告16、1951年12月)
- 19) トネリ状のボリュームは、表1では入口キャビと同じく◆で表記した。

写真4 中庭 No.60 鳴門市文化会館

[2010年6月12日原稿受理 2010年10月15日採用決定]